

27B-pm01

名古屋市立大学病院における過去 10 年間の Benzodiazepine 系薬物の使用実態とその背景

○外ノ池 文乃¹, 山本 清司^{1,2}, 川出 義浩^{1,2}, 江崎 哲夫¹, 中山 明峰⁴, 木村 和哲^{1,2,3} (1名市大病院薬, 2名市大院薬, 3名市大院医, 4名市大病院睡眠医療セ)

【目的】1960 年代に登場した BZ(Benzodiazepine)系薬物は、薬物依存や離脱症状が問題となり欧米先進諸国では 1970 年代後半に処方件数が激減した。一方、わが国は先進諸国の中で突出した処方件数を示し、2010 年の国際麻薬統制委員会の報告書でもその処方量の多さが取り上げられた。これらの現状を受け、当院での BZ 系薬物とそれ以外の抗不安薬および睡眠薬と鎮静薬の使用量を後向きに 10 年間調査した結果から、大学病院での BZ 系薬物の使用実態を把握しその背景を考察した。

【方法】2004 年 4 月から 2014 年 3 月に以下の対象薬剤が処方された当院の入院患者 (n = 2, 454, 512 人) を対象とした。対象薬剤は ATC(Anatomical Therapeutic Chemical)分類にて「抗不安薬」および「睡眠薬と鎮静薬」に分類されている当院採用の 25 種類、39 剤である。処方された件数、錠数、人数を年度ごとに抽出した。

【結果】BZ 系薬物およびゾピクロンやゾルピデムなどの非 BZ 系薬物の処方量は 10 年間に渡って増加の傾向にあった。2010 年に発売されたメラトニン受容体作動薬であるラメルテオンも同年の採用以来処方量は増加していた。また、2013 年度に処方された BZ 系薬物のうち、眠剤としての処方件数が多かった薬剤はプロチゾラム (16, 750 件)、トリアゾラム (8, 825 件)、エチゾラム (4, 025 件) だった。これらのうち一般診療科からの処方の割合が最も多かったのはエチゾラム (73%) だった。

【考察】今回、当院での BZ 系薬物の使用実態が欧米先進諸国の流れに逆行していることが浮き彫りとなった。その要因の一つとして BZ 系薬物が引き起こしうる身体的、精神的な有害作用について十分に熟知しない医師による処方が多いことが考えられた。今後、薬剤師として短期使用による副作用だけでなく長期使用による耐性や身体依存といった副作用にも目を向けた適正な処方を提案していきたい。